入選（高学年の部）

ラジオ体操にこめられた想い

鹿児島県　宇検村立名柄小学校 五年
内田 詩大（うちだ うた）

「ラジオ体操は自分のためですからね。やりたくない人はやらないでいいんです。」

これは祖父が夏休みの初日に毎回言う口ぐせだ。

私が住んでいる佐念集落では、夏休みの始まりと同時にラジオ体操も始まる。私は朝六時十分ごろに起きて、会場になっている土俵に行く。そこには必ず祖父が準備をしてまっているので、

「おはよう、おじいちゃん。」

とあいさつする。

すると、私の倍以上の声と元気で

「おはようございます！」

と返してくれる。

冷たい山水で顔を洗い、思いっきり深呼吸をする。朝の空気はとてもすがすがしくて、頭も心もすっきりする。そして、ラジオから流れるニュースや鳥の鳴き声を聞きながら、みんなが集まるのを待つ。これが夏休みの私のルーティンだ。

私は必ずラジオ体操に参加することにしている。決して私はラジオ体操大好き人間ではない。

「ラジオ体操は自分のため。やりたくない人はやらなくてもいい。」

祖父の口ぐせを初めて聞いた時は、「早起きするのもめんどうだし、やりたくないな。」と思った。祖父の「やりたくない人はやらなくていい」という言葉だけを受け取り、好きなことをして過ごしていたい時もあった。

そんな私がどうしてラジオ体操に行くのか。それは父から祖父の話を聞いたからだった。私がまだ幼いころ、祖父は命に関わる大きな病気をわずらった。何時間もの大手術を受けて何とか元気な体を取りもどした祖父は、それから食事を見直したり運動を始めたりと、健康な体を意識するようになったらしい。そしてその取組の一つが、ラジオ体操だった。

「おじいちゃんは、自分が健康な体を保てるように、そして集落のみんなが健康でいられるようにラジオ体操をしているんだよ。」

「だから「自分のため」って言ってたんだ。」

私は祖父の思いがうれしかった。

はじめは祖父と祖母、そして私たち家族で始まったラジオ体操も、今では地域の方や友達も参加をしている。来年小学入学する妹も今年から参加するようになり、一生けん命祖父の真似をしている。きっと祖父の思いが妹にも伝わったのだと思う。

私は今日もラジオ体操に行く。そこには誰よりも早く来て、ラジオ体操の準備をしてる祖父の姿があった。祖父のラジオ体操には、みんなの健康を願う心がつまっている。

「ありがとう。おじいちゃん。」

そんなことを思いながら、ラジオから聞こえる軽快な音楽に合わせて、私は大きく両手をふり上げた。